

木谷恭介

書下ろし旅情ミステリー

日南海岸殺人事件



KOFUSHA NOVELS

日南海岸殺人事件

著者 木谷恭介

発行者 深見悦司

発行所 光風社出版株式会社

東京都文京区春日二の四の一

TEL〇三―五八〇〇―四四五―

FAX〇三―五八〇〇―四四五―

印刷 大盛印刷株式会社

製本所 株式会社越後堂製本

落丁、乱丁はおとりかえします。

定価及び発行日はカバーに明記しております。

© 1996 KYOSUKE KOTANI Printed in Japan

ISBN4-87519-668-7

書下ろし旅情ミステリー

日南海岸殺人事件

木谷恭介

原

书

空

白

原

书

空

白

目次

第1章	堀切峠・身元不明の死体	9
第2章	宮崎・寂しさの果てなむ国	47
第3章	日南海岸・新婚旅行の縁	83
第4章	綾町・貝紫の謎	127
第5章	九州中央山地・峡谷の大吊橋	168
第6章	駒沢公園・女豹の目をした女	203
第7章	運河の町・亀戸天神裏の寂蓼	241

あとがき 277

木谷恭介著作リスト

装画——坂本勝彦

日南海岸殺人事件

第1章

堀切峠・身元不明の死体

1

自宅にちかいバス停を降りた桑野香津子^{くわのかずこ}は、東の空へ目をやった。

^{ひゆうがなだ}日向灘からの潮風と砂をふせぐ防風林が黒いシルエットとなって延々とつづき、その黒松の林の彼方から、まんまるな月が昇ってくるところであった。

夜の八時半をすこしすぎていた。

六月はじめの月曜日。数日まえ、梅雨入りが発表になった。空気が湿っているせいか、月は無気味な赤い色をしていた。

その赤い月が防風林のなかに建っているオーシャンドームを照らし、ドームのまるい屋根を巨大な発光体のように輝かせていた。

オーシャンドームは全長三百メートル、幅百メートル、高さ三十八メートル。四季をとわず常夏の海の楽しさを満喫^{まんきつ}できる全天候型、世界最大のウォーターパークで、ドームにおおわれた室内に人工の砂浜がひろがり、人工の波が寄せては返し、サーファ―タイムには高さ二・五メートルの特大波を味わうこともできる。

オーシャンドームの先には、九州一の高さの『ホテルオーシャン45』がそびえ立ち、その南北にひろがる二つのゴルフ場やテニスクラブ、国際会議場などとともに、南北十二キロ、ひろさは東京デイズニ

ーランドの十倍ちかいリゾート施設『シーガイア』で、宮崎のシンボルになっている。

シーガイアは海（SEA）と大地（G A I A）。

日本国内はもちろん、台湾や韓国からの団体観光は、かならずシーガイアをコースに組み入れるという人気を呼んでいた。

香津子の家はそのシーガイアに隣接する住宅団地にあった。

バス停から五十メートルほど歩き、道路沿いのパチンコ店のまえに差しかったとき、香津子は飛びあがりそうになった。

背後でおおきな音がふたつつづけて鳴ったのだ。自動車のタイヤがパンクしたような音であった。

その音と同時に、道路の左手にあるパチンコ店『コンコルド』のネオンが碎けて散った。

香津子は肩をすくめ、音のしたほうを振り向いた。黒塗りの乗用車が一台、フルスピードで走り去っ

て行つた。

咄嗟には何が起きたのか、わからなかった。

コンコルドから四、五人の男が走りでてきたが、その男たちも何が起きたのかわからないらしく、店のまえの駐車場に立って、碎け散ったネオンをみあげていた。

「拳銃で撃ちよつたんじゃ」

男のひとりが叫ぶようにいったのは、音がして二十秒か三十秒、経ってからであった。

その声を聞いて、香津子の背筋をうそ寒いものが走るのを感じながら、恐るおそる音のした方向へ目をやった。ネオンを狙って撃つたのだから、角度はちがつていたが、フルスピードで走る車のなかから発砲したのだ。ひとつ間違っていたら、巻き添えを食ったかもしれない。

「一一〇番へ通報するんじゃ！」

叫んだ男が横でネオンをみあげている若い男に命

じると、

「お嬢さん！」

香津子へ向かって走り寄ってきた。

男は四十二、三歳で、烏天狗のように口のとがった顔をしていた。黒っぽいスーツを着て蝶ネクタイを締めていた。コンコルドの店長らしい。

「拳銃を撃った車を目撃せんかったかね」

男は引きつった顔でたずねた。

パチンコ店はガラスの城のような造りで、その煌々とした明かりが男のからだをシルエットにさせている。

「黒い車でしたけど……」

「ナンバーをみなかったですか」

「いえ……」

香津子は首を横に振った。

そんな余裕はなかった。おおきな音がしたのと、ネオンが砕けたのと車が走り去ったのは、ほとんど

一瞬の出来事であった。

「車はどっちへ走って行きました？」

「あっちへ……」

香津子は北を指さした。

黒松の林の奥にホテルオーシャン45が光の塔となつてそびえている。地上四十三階、地下二階、高さ百五十四メートルのリゾートホテルであった。

男は車が走り去ったほうへ目を投げ、

「撃ったのが誰なのか、見当はついてるんじゃない。この三、四日、ごたごたがつづいて、警察に何度も通報したんじゃないが、まともに取り合ってくれんもんじゃけんね」

ぼやくようにいった。

「警察が取り合わないんですか」

香津子は思わずたずね返した。聞き捨てにできなかったのは、香津子の父が警察官だったからだ。

「今日も変造したプリペイドカードを持つとる中国

人を捕まえて、警察に突きだしたんじやが、カードを持つとるだけでは犯罪やないいうてね」

男はじれったそうに靴の爪先で、歩道のガードレールを蹴った。

「中国人？」

香津子は男の横顔へ目をすえた。

「十日ほどまえテレビのニュースでやっとなったじやろうが……。変造したプリペイドカードで、カードの会社が六百億からの損害をだした、と。東京や大阪では警察が本腰を入れて取り締まるようになったもんじやから、地方へながれてきたんじや。拳銃を撃ち込んだのは嫌がらせじゃね」

男がそういったとき、遠くでパトカーのサイレンが聞こえ、みとおしのよい県道のずっと先で赤いランプが点滅した。

「お嬢さん、車を目撃した証人になってもらいますよ。いいですね」

男は押しのつよい口調でいった。

香津子は頭のなかで、父に迷惑をかけることにならないかどうかを計算した。

父は宮崎中央署の防犯課長で、パチンコ店と縁がなくはない係であつた。

「証人にはなりますが、そのまえに家に連絡しますから、電話をお借りできますか」

香津子がたずね、

「ああ、どうぞ。はいったすぐ左手にあります」

男はちかづいてくるパトカーをみつめながらいった。

香津子は小走りにコンコルドのドアを押した。

コンコルドはできてから二年ちよつとなる。整然とならんだパチンコ台、ホールをながれる甘い映画音楽。客の入りは五割ほどだったが、店内の一角に洒落たロビーもつくられ、その横にみどりの電話が設置されていた。

家の番号をプッシュした。

「桑野ですが……」

めずらしく父が電話にでた。

「わたし……。いまパチンコのコンコルドにいるの。コンコルドのまえをとおりかかったら、黒い乗用車に乗ったひとがコンコルドのネオンに拳銃を撃ち込んで……。その証人になってくれって……」

「拳銃？」

父は怪訝けげんな声をだした。

「なんだか、この三、四日ごたごたがつづいてて、偽造のプリペイドカードを持ってた中国人を警察に突きだしたとかいってるわよ」

「わかった。すぐ、そちらへ行く」

父はそういつて電話を切った。

香津子は受話器をフックにもどし、店をでた。

駐車場で制服警官と蝶ネクタイの男がいい争っていた。男は、外勤課の警官ではらちがあかない、暴

力団担当の刑事を呼んでくれと主張し、制服警官はその権幕に押されて、連絡のためパトカーへ走って行くところだった。

のこった警官がコンコルドからでてきた香津子を見とめると、

「お嬢さん！」

敬礼をし、蝶ネクタイは意外そうな顔で、

「あなた、どちらの？」

値踏みするように香津子を見つめた。

「防犯課長のお嬢さんですよ」

制服警官が得意そうに説明し、

「桑野課長の？」

蝶ネクタイは香津子の目をのぞき込むと、

「自分は店長の黒木といいます。課長には日頃からお世話になっております」

急に態度が変わった。

パチンコ店の許認可や営業を取り締まっているの

は防犯課であつた。店長の黒木にしてみれば、誰よりも煙たい人物の娘だったので泡を食つたのだろう。

「お怪我はなかつたですか」

制服警官がたずねた。

名前は思いだせないが、一度会つた記憶がある。

香津子よりひとつか二つ年上で、まだ三十歳にはなつてないはずだ。長身でひよろひよろしたからだつきが警察官らしくなかつたし、顔だちにも警察官になりきつてない甘さがのこつていた。

「わたしは大丈夫……」

香津子がそうこたえたとき、パトカーのサイレンが遠くちかく響いた。四台五台と、続々集結してくるようだ。

コンコルドのちかくには運送会社とドライブインがあるだけで、民家はすこし離れていたが、野次馬があつまりはじめていた。パチンコをしていた客も二十人ほどでてきて、次々と到着するパトカーを見

守つていた。

宮崎は温和な土地柄だから、拳銃の発砲騒ぎなどこれまで、ほとんどなかった。

それに変造したプリペイドカード、中国人。警察に突きだされた嫌がらせ。

防犯課長の父の責任になるのではないか。

香津子の胸はわるい予感でふるえていた。

2

香津子の父の邦弘くにひろが車で駆けつけてきたのは、三分ほど後だった。

父は香津子と店長の黒木から、発砲があつたとき
の状況を聞くと、

「おまえはしばらく待っていなさい」

香津子にそう告げ、黒木をうながしてコンコルドのなかへはいつて行つた。

香津子は駐車場の端で、現場検証とそれを取材しているテレビのクルーをみつめた。

作業服を着た警察官が、コンコルドの入口付近に散らばったネオン管の破片に白墨はくぼくでまるを描き、従業員に用意させた梯子でテラス風の屋根に登り、銃弾がつかぬいた壁の穴をたしかめ、それをテレビのライトが照らしだしている。

「寒くないですか」

声をかけられ、振り向くとさっきの制服警官が香津子をみつめていた。

「いいえ」

「それならいいんですが、こういう事件は始末に負えないんです」

制服警官は屋根のうえの捜査員へ目をやった。

その目で思いだした。制服警官は長友ながともという名前であつた。父親が観光タクシーの運転手をしている。個人経営のタクシーで、日南海岸やえびの高原など

をめぐる観光客専門に営業し、これまでの三十五年間に扱った新婚旅行の客が四千組。

毎年、年末になるとその四千組にかかさず年賀状をだす。

その宛て名書きを手伝わされると、ぼやいていた警察官であつた。

「この三、四日、変造のプリペイドカードをつかう中国人がいるとか、店長が話してましたけど……」

「ええ。中国人のグループが二十人ほど宮崎にきてるようです。駅前の喫茶店で三千円のカードを五百円で売ってるという通報があつて駆けつけたんですが、すごい美人に鼻であしらわれました」

長友は甘いマスクをそよがせた。

「美人？」

「ええ、黒いドレスを着た三十歳ぐらいの妖艶な美人でした。その美人が変造グループのボスで、目撃者の話では、自分が駆けつける直前まで、南川みなみかわと会